

< 原著論文 >

「生を支え続ける死」としての輪廻思想 —古代インド思想における生死観—

Samsāra as "death that continues to support life"
— life-and-death issue in ancient Indian thought —

森口 眞衣 (日本医療大学)
Mai MORIGUCHI (Japan Health Care College)

要旨

死生学という学問領域の中心は西洋思想を基本とした大きな流れである。しかし日本人の死生観には、仏教をはじめとする東洋の思想や宗教、文化などからの深い影響がある。そのため日本の死生学では、西洋思想だけではなく東洋思想にも幅広く関心をもつ必要性が指摘されている。そこで、「死」を取り扱う宗教研究の領域から視座提供のひとつとして、古代インドにおける輪廻思想を題材に論じたい。

ここでは死の位置づけとして2つの異なる視点を設定した。1つは「差し込まれる死」という視点、もう1つは「生を支え続ける死」という視点である。前者はキリスト教的な死に対する態度であり、西洋の死生学の基本といえる考え方である。後者は古代インドでいくつかの段階を経て完成した輪廻思想がもつ考え方であり、日本文化に大きな影響をもたらした仏教が成立する背景ともなっている。本稿は輪廻思想の成立段階でそれぞれ生と死がどのように位置づけられていたかという流れに沿って、「生を支え続ける死」の構造と特徴を考察した。

Abstract

At the center of the academic discipline known as thanatology (death-and-life studies) is the major current of the foundation of Western thought. However, the views on life and death of the Japanese have been deeply affected by Eastern thought, religion, and culture, such as Buddhism. Therefore, it has been noted that in Japanese thanatology, there is a *samsāra* (the cycle of reincarnation) in ancient Indian society as providing one perspective from the area of religious studies on dealing with "death."

Two different perspectives for the positioning of death have been established. The first is the perspective of "the inserted death," and the second is the perspective of "death that continues to support life." The former is a Christian attitude toward death and is a philosophy that can be described as the foundation of Western thanatology. The latter is a philosophy from ancient Indian society, of the notion of completing *samsara* after passing through several stages, and it also formed the background to the formation of Buddhism that has had an enormous impact on Japanese culture. In this paper, along with the flow of how were death and life respectively positioned in the establishment stage of the notion of *samsāra*, the structure and characteristics of "death that continues to support life" are considered.

Keywords : thanatology (死生学)、 *samsāra* (輪廻)、 ancient Indian society (古代インド社会)、 *dharma* (業)

はじめに

生命倫理領域において生や死の観念を問うとき、「死生学」「死生観」といった用語は最も一般的なものとして用いられてきた。英語の thanatology はギリシア語で死を意味する thanatos に由来する。死生学という領域が生まれ発達した背景には、人間はこれまで「自己が消滅する」という形をとる「死」へどのように向き合ってきたのか、また人間は死に至るまでの「生」という時間の枠組みをどうとらえるのか、という関心がうかがえよう。それはいわば人間が「死へ向かう生き方」への取り組みに対する考察としての位置づけである。近年では death studies などという表現もなされており、同様にいずれ訪れる「死」を前に人は何を学び、いかなる生き方をすべきなのかという問題意識が看取できる。つまり「死」を軸にして「生」を見つめるという視点であり、両者を対比的な概念として扱う姿勢である。

生者の時間軸でいうならば、自らの「生」が進む中でその途中に訪れる「死」はいわば「差し込まれる死」である。「死」は人生において一度きりの経験であるが、当事者がどんなに拒んでも回避することはできないうえ、たとえ迎える用意ができていなくても容赦なく訪れる。回復の見込みがない身体状況に陥った人のもつ「生」の時間が目前で途絶えざるを得なくなる「死」は、単なる生命活動の停止という科学的現象としてだけでは納得のいかない深い悲しみの感情を人間にもたらす。このような経験は死にゆく当事者にとっても、またその死を見守らなければならない周囲にとっても等しく耐え難いものといえる。

イギリスやアメリカなどで死生学の話題が活発に論じられることになったのはホスピス運動がさかんとなった 1960 年代頃とされている¹⁾。その背景には回復の見込みがない病気の終末期を迎え、しかも死が目前に迫りつつある患者にとって、あるいはその家族にとって、避けられない「死」を受けとめ、少しでも望ましい形になるよう準備する必要があるのではないかという臨床現場からの要請があった。時を同じくして臓器移植や遺伝子診断、体外受精など最新の医療技術の開発が飛躍的に進んだことに伴って生命の扱いに関わる倫理的な問題が次々と噴出し、当時のアメリカで活発化していた人権運動の流れを背景に bioethics (バイオエシックス) と呼ばれる学問領域が成立したことは多くの生命倫理学者にとって自明の経緯である²⁾。

こうした状況を踏まえつつ、病名告知や安楽死、緩和医療などの場面において従来の医学が用いてきた自然科学的なアプローチの枠を超えたものとして、死生学の領域は生命倫理とともに確立してきたことになる。しかし英語の thanatology に加え death studies さらに death education など、領域を示す名称は一定ではなく、また日本語でも議論の重点によって「死生学」あるいは「生死学」と訳すなど、いまだ流動的な状況にある³⁾。生命倫理については既にその領域の枠について世界的にもある程度共通した理解が確立してきたとされているが、生命倫理と内容的に重なり合うテーマが非常に多い死生学の領域が整理されていくには、いまだ少し時間を要するだろう。死生学が学際的研究を行う分野として位置づけられているのは、肉体に生じる自然科学的な「死」を取り扱う医学とその近接領域だけでは解決のつかない問題に取り組むことを目的とするからである。そのため、死生学には、死に対する人間の態度そのものを扱う幅広い領域から知見を得ようと展開し、伝統的に死を直接の対象として取り扱ってきた哲学や宗教学をはじめ、現在までに文化人類学・民俗学・芸術学などさまざまな人文学の領域が接点をもってきた。今後もその傾向は強まり、死生学の関連領域はさらに拡大するものと予想される。

死生学には西洋的発想を基本とした大きな流れがあるが、日本ではそれに加え仏教系ホスピスとされるビハラー運動が 1980 年代から始まっている。これは日本の死生学において西洋的発想のみが文化一般的理解ではなく、それ以外の思想にも関心をもつ必要性があることに気づいた証左のひとつといえるだろう。本稿では「死」を取り扱う宗教を研究する領域からの視座として、死生学に対してあまり頻繁には提供されない、仏教思想の背景ともいえる古代インド思想におけ

る生死観から「輪廻」⁴⁾を題材として論じる。まず死生学の基本思想としてみられる「差し込まれる死」とは異なる「生を支え続ける死」という視点を想定する。次に輪廻思想の成立過程の中で「生」と「死」がどのように位置づけられていくかを確認しながら、「生を支え続ける死」の構造と特徴を考察したい。

1 「死」の重みと位置づけ

ここでは「死」の位置づけについて、2つの異なる視点を想定する。ひとつは「差し込まれる死」という死生学の基本ともなっている視点であり、もうひとつは「生を支え続ける死」という、「輪廻」を題材に本稿で提示する視点である。

1-1 「差し込まれる死」という視点

「差し込まれる死」とは、「人間は死を免れることはできない」という恐怖を伴う自覚を出発点にしている。古代から「人はなぜ死ぬのか」という問いは様々な角度から追及されてきたが、自らが死を目前にした場合はともかく、とくに死にゆく人を目前にした場合において、このような自覚や問いを持たずに死を迎えることはむしろ稀なのではないだろうか。この自覚や問いに対する取り組みの歴史は、古代から現代にわたって「かけがえのない生を奪うものとしての死」あるいは「死という避けがたいできごと」に対峙する人間の姿を常に映し出してきた。生はなぜ死によって分断されなければならないのか。この問いを発するのは常に、現に生きている、つまり「まだ死が差し込まれていない生をもつ」人間のほうである。

『旧約聖書』にはその問いに対する答のひとつが示されている。冒頭部分に位置する「創世記」第3章で収録されている有名な失楽園のエピソード⁵⁾は、人間が神に対して犯した罪との関わりの中で「死」を取り扱ったものである。神の園で永遠に生を続けるはずであった人間は、祖先であるアダムが神に禁じられていた果実を食べてしまったため、「人間に生命を与えた神の命に背く」という罪を犯したことにより「生」が途絶える存在へと変化してしまう。神がアダムを園から追放したとき、最初の人間による罪の結果としてもたらされた「死」は、アダムの子孫であるすべての人間が必ず背負わなければならないものとなったことが示されている。

失楽園のエピソードに見られる「死」とは、本来は神から個々の人間に与えられたものである、たったひとつの尊い「生」を、一種の刑罰として断ち切る存在としての位置づけであろう。その「死」には避けたくとも避けられない、最後に必ず受けなければならないものとしての運命的な重みが常にある。このような「生に差し込まれるもの」という視点は、死生学における死の位置づけと共通する。死を避けられない人間存在として死を見つめ考えていく姿勢は、西洋において大きな影響力を持つキリスト教的な⁶⁾「死」への態度の原型となってきた。死生学の領域で「生」と「死」をめぐる議論⁷⁾が行われてきた際には、基本的に「差し込まれる死」という視点のもとに展開されることが多いといえよう。

1-2 「生を支え続ける死」という視点

「生を支え続ける死」とは、別の言い方をするならば「生を消滅させない」ものとして「死」が機能すると見なす視点である⁸⁾。ここではまず、「輪廻」を前提とした「生死」の考え方を説くものとして知られる初期仏教経典を用いて論じたい。なお、初期仏教経典とはパーリ語⁹⁾の『ニカーヤ (*Nikāya*)』および漢訳の『阿含経』(パーリ語の *Āgama* の音訳)としてまとめられている経典群をさし、スリランカや東南アジアなど南方へ伝播した上座部系仏教においてはゴータマ・ブッダ直説と位置づけられてきたものをいう¹⁰⁾。

初期仏教経典の漢訳には「生死(しょうじ)」という翻訳語が多く見られる。この語だけを見るならば「生に差し込まれる死」と同様、生が続くのちに死が訪れるという時間軸の存在を想定

できよう。初期仏教経典は死に関わる教説が多いことで知られており、人間は死ぬ存在であるという現実への直面、自殺、死の判定や死後についてなど、具体的な問題が取り上げられている¹¹⁾。しかしここで多く用いられる「生死」の原語 *saṃsāra* はパーリ語で「流れる」という動詞 *sam-√sṛ* に由来する名詞であり、川面を流れゆく葉が浮き沈みを繰り返すように、生命をもつものがさまざまな生存の状態を「繰り返しさまよう」ことを表している。また *saṃsāra* に対して漢訳経典では「車輪が廻るとどまることがない」という意味で「輪廻」という別の翻訳語も作られており、用語としてはむしろこちらのほうがよく知られてきた。

一般に *saṃsāra* も「輪廻」も「生と死を絶え間なく繰り返す」という意味で用いられている¹²⁾。初期仏教経典には *jātimaraṇa-saṃsāra* というパーリ語が登場するが、*jāti* と *maraṇa* はそれぞれ「生」「死」を意味し、「生死」を「輪廻する＝繰り返す」とする表現である。初期仏教において生も死も「一度きりのものではない」「繰り返すもの」とする位置づけは、古代インドの輪廻思想を前提に展開されていたことが想定されてきた¹³⁾。代表的な教説のひとつ「縁起説」では、多くの人間が恐れる老・死は生を縁として起こるものであること、老死の原因とされる愁・悲・憂・悩などの苦しみを解決するためには生死を繰り返す輪廻から脱却しなければならないことを説く。苦しみの根本的な原因は無知(=無明)の状態であり、これを止滅(しめつ)させるために「智慧」すなわち「悟り」を獲得することこそが輪廻からの解脱である、という考え方を基本としている。

このような最初期の教説の中で説かれる「死」の議論が既に輪廻を前提としていたことは周知の事実である。ゴータマ・ブッダは伝統的あるいは正統的といわれるバラモン文化の流れに対し、それを否定する立場を取っていた。当時のインドでは自由思想家と総称されるバラモン文化否定の立場を取る人々が活躍しており、仏教というグループを含め当時の多くの自由思想家たちにとっての関心は輪廻からの解脱であったことが仏教経典の記述によって知られている¹⁴⁾。輪廻からの解脱はバラモン文化においても重要な目標とされていたが、思想家としての立場に関わらず扱われるべき中核的な問題であったことがうかがえる。

輪廻思想のように生と死が「何度も繰り返される」という考え方は、先述したような「生はかけがえのない唯一のものである」という生命の尊厳につながる考え方とは、かなり異なる視点といえるだろう。今ここにある、ただひとつの自分が限られた生命をもつ状態としてあるからこそ尊厳をもつのであり、それを奪う死もまた、生を封じ込める存在として深い意味を持つはずである。しかし輪廻思想では、生は決してかけがえのない唯一のものではなく、何度も繰り返し絶え間なく苦しみをもたらす永続的なものとなってしまう。さらにその合間で何度も差し込まれる死もまた生を限られた存在へと封じ込められるほどの力をもつわけではなく、現在の生を繰り返しもたらされる次の生へとふたたび連結するものにすぎない。この点で輪廻思想における「生」は「死」が差し込まれることによって永遠に続いていくものとならざるを得ない。避けられないのは死そのものではなく、むしろそれによって苦しみに満ちた生が続いていくことのほうなのである。つまり、ここでの「死」は「生」を真の意味では終わることなく続けさせるために機能し続けているものといえよう。そこで本稿ではこれを「生を支え続ける死」と位置づけることにする。以下では、古代インド思想において輪廻という考え方が成立し発展していく流れに沿いながら、「生を支え続ける死」という視点がなぜ生まれたのかという背景を考察する。

2 輪廻思想の成立と「生」「死」の位置づけ

輪廻思想は仏教よりもはるかに古いものとして想定されたと考えられているが、その起源については未だ推測の域を出ていない。ここでは輪廻思想に関わる特徴的な概念を取り上げながら、「生」と「死」の位置づけの変化をみていく。輪廻思想はヴェーダ聖典¹⁵⁾の時代に長い時間をかけ3つの段階を経て成立したものであるという位置づけが定説であるため、本稿ではその成立段階に対

応させつつ、輪廻の前段階としての Yama の世界、輪廻の契機となった「再死」、輪廻の原因となる「業」をそれぞれ取り上げる。

2-1 Yama の世界：「生を支える死」

古代インド思想を知るうえで最も重要な文献は、インド文化において最も古く成立したとされる神々への讃歌の集成『リグ・ヴェーダ (*R̥g-veda* :RV)』¹⁶⁾である。最初期の段階でサンヒター (Sāṃhitā) と呼ばれるヴェーダ聖典が成立した時代には、いまだ明確な輪廻思想は見られず、代わりに Yama の住处として知られる一種の「死後の世界」がゆるやかな形で想定されていたという仮説が多く研究者によって提示されている¹⁷⁾。

大いなる高みに遥か去り、多くの者のために道を探し示した、Vivasvat (ヴィヴァスヴァット) の息子であり、人間を集める者である、Yama 王のために、供物をもって崇めよ。Yama は我々のため、最初に住处を見出した。この牧場 [=住处] が奪い取られることはない。

我々の古い祖先が去ったところ、そこへ子孫は自己の道に従って [行くのである]。¹⁸⁾

Yama は太陽神 Vivasvat の息子であると同時に人間の祖のひとりとして知られ、最初の人間であるがゆえに人間で最初の死者となり、自ら死者のための住处を開拓した王でもあった¹⁹⁾。さらに Yama は仏教に取り入れられて「夜摩」「閻魔」などの漢訳語があるが、表記から想像がつくとおり中国や日本においては「閻魔 (大) 王」として知られ親しまれてきた、いわゆる地獄²⁰⁾の主でもある。

ヴェーダ聖典の内容調査から、この時代には、人間は死後に肉体を失って魂だけの存在になり、Yama が作った天上にある自然や飲食物の豊富な理想郷といえる住处へ行って再び肉体を得て、先に死去した祖先たちや神々とともに幸福に暮らせるものという考え方が存在していたことが提示された。しかしその描写はいまだ萌芽的であり、厳密な形には整理されていなかったという状況が推測されている。また、ここでいう Yama の住处のように死後に他界へ移住すること、移住の条件として地上にいるうちに善い行いをしなければならないとすること自体はもちろん古代インドに限ったことではないが、その善い行いの内容として、既にこの時代からインド文化の特徴ともいえる「祭式の実行」が非常に重要なものとして位置づけられていた可能性が想定されている²¹⁾。

先述の「差し込まれる死」の考え方では、理想郷を追われる契機に位置づけられたことで、「死」は神に対する罪として重く背負わなければならないものとなっている。しかしここでの「死」は Yama の住处という新たな「生」に移住するための契機である。Yama の住处は「死」後の行き先ではあるものの、理想郷でより充実した「生」を得るという意味では、「死」が二度目に繰り返される「生」を支えるものになっている。この点で「差し込まれる死」の考え方に比べると「死」の位置づけはかなり楽観的といえるだろう。ただしこの段階では二度目の「生」の先までは明確ではなく、永遠の繰り返しとまでは言い切れない。したがってここでの「死」は少なくとも現世と Yama の住处 (=来世) 合わせて2つの「生」を支えるものとして機能していたと考えられる。本稿では「生を支え続ける死」という輪廻思想の前段階において、まず「生を支える死」という位置づけが成立していたものと想定する。

2-2 「再死」の概念：「死を支える生」

輪廻思想の前段階において Yama の住处と関係づけられていた「死」は、よりよい「生」をもたらすという役割を担うものであったといえる。では、どのようにしてその「生」が苦しみに満ち、それを支える「生」もまた苦しいものとなっていったのだろうか。

『リグ・ヴェーダ』に代表されるヴェーダ聖典の中心は祭式に関する内容であるが、そこに示された歌詞や実務などについての規定の内容や解釈は、その後体系化されてブラーフマナ

(Brāhmaṇa) と総称される文献群に集成された。ブラーフマナ文献の研究が進むにつれて明らかになってきたのは、祭式の価値は神々さえも上回り、正しく実行することですべてを支配できるという考えから、いわば正しい祭式の実施方法が何にもまして最重要になった可能性であるという²²⁾。祭式の実行者であるバラモンたちは神々と等しい力を得たばかりでなく、むしろ祭式の道具として神々を動かせるほどの地位に引き上げられ、祭式至上主義あるいはバラモン至上主義という、キリスト教的な神に対する考え方とは全く異なるインド独特の特徴的な神と人間の関係が成立していたことが指摘された²³⁾。

祭式の絶対的な価値が上がり、正しく実行することで確実に力を得られるというブラーフマナ文献の時代に、行為を原因として結果がもたらされるという「因果応報」の考え方と並んで登場したと多くの研究者がみなしているのが「再死」の概念である。「再死」はサンスクリット語で「再び死ぬこと」を意味する punarmṛtyu の日本語訳で、死後に Yama の住処という理想郷に再び生まれて幸福な生活を送ることができたとしても、肉体を持つ以上やはりそこでも再び死ぬことになり、理想郷での生活は決して永遠に続くものではない、とする考え方である。ブラーフマナ文献の内容調査により、生前に祭式を行うこと、また死者のための追善祭式を行うことなどに関する記述の多さから、当時の人々が再死を非常に恐れていたこと、また再死を回避するためには、それらの祭式を完璧に実施することが善行として熱心に目指されるようになっていた可能性が指摘されている。

再死という概念が登場したことにより、「生」と「死」の関係は変化したといえる。善行を重ねて現世における死の先に「生」を得たとしても、やはりその先にも必ず「死」が約束されているので、さらにその分も含めて善行を重ね続けておかなければならない。人々が「死」を支配するために祭式を厳密に追及した結果、その祭式から逆に今の「生」を支配されることになってしまったともいえるだろう。現世での死だけでなく死後の死までもおそれ、それを回避するためにひたすら祭式に明け暮れるという「生」は窮屈で苦しいものとなる。Yama の住処によって喜ばしいものと位置づけられていたはずの死後の「生」は、その「生」によって再び「死」がもたらされることの発見により、苦しみの色彩を帯び始めたことになる。つまりこの時代の「生」は再死を回避するため祭式に人生を捧げるという意味で「死を支える生」であるといえよう。「生を支える死」に続いてこの「死を支える生」が成立し、両者が互いを支える図式ができたことを、本稿では輪廻思想の基盤として位置づけることにする。

2-3 業の概念：「～し続ける死」

古代インドにおける輪廻思想は、ブラーフマナ文献に続いて成立したウパニシャッド (Upaniṣad)²⁴⁾ と総称される文献群において明確に説かれるようになったとするのが一般的である。輪廻の原型として有名な「五火二道説」は、古代インドの王族のみに「秘説」として保持されていた「五火説」「二道説」が後にバラモンにも伝わり広まったものと考えられている。五火説とは、火葬の煙を通った死者は①月に至り、②雨となって地上に降り注ぎ、③食物に入って食べられ④精子となり、⑤母体に入って胎児として再生するという考え方である。いっぽう二道説とは、「月に至って地上に戻る」という基本的な図式は五火説と同じであるが、その通り道を devayāna (神の道) と pitṛyāna (祖先の道) という 2 つに分け、さらにどちらも通れない者が落ちる第 3 の場所を設定する考え方である。devayāna で輪廻の基本的な構造が明確化され、pitṛyāna で輪廻の範囲が限定化されたことによって「生」と「死」を無限に繰り返すという輪廻思想が確立したとするのが定説である。ウパニシャッド文献の調査により、特に二道説では祭式の効果に限界があるという主張が見られることから、この時代にはすでに祭式が重要視されておらず、祭式至上主義あるいはバラモン至上主義が薄れ始めていた可能性が想定されている²⁵⁾。

ブラーフマナ文献の時代には「生」と「死」に関わる絶対的な要素であった祭式に代わって、

devayāna と pitṛyāna および第 3 の場所への振り分けを決定づける原因としてウパニシャッドで重要視されるようになったと考えられているのが、意志・動作・言語のはたらきを総称する「業(ごう)」という概念であり、サンスクリット語では行為一般を意味する karman という²⁶⁾。何かの行為をなすと、それが原因となって何らかの結果が生まれるという、いわゆる因果応報の考え方そのものであるが、それは例えば誰かが見ているか、自分が覚えているかといったことには関係なく、業は行為の主体・客体の意図からは完全に独立した強力なものという位置づけが基本とみなされており、キリスト教のように創造神や審判神をもたないインドにおいて、業への態度は神に対するそれに等しいとも指摘されてきた²⁷⁾。

完成した輪廻思想によると、devayāna とは煙に乗って上空へ行ったのち地上に戻ってくることをない解脱の道であり、大多数の人間は pitṛyāna を通って地上に戻ってくることになるという。清らかな行いをすると高い身分階級の人間に生まれ、醜い行いをすると身分の低い人間や家畜などに生まれ、さらに悪い行いをすると第 3 の場所へ行って虫に生まれる。すべての生物にとって業による結果としてもたらされる輪廻には、もとの生まれや育ちなどといった先天的なもの・後天的なものとの関係は基本的に切り離され、さらに輪廻後の生まれ先という意味では人間とそれ以外の生物に対する区別も存在しないことになるので、人間・動物あるいは神・魔を含め、あらゆる生命が平等に位置づけられたものとみなすのが一般的な見解である²⁸⁾。

このような輪廻の考え方では人間が特別視されることもなく、また現世における人間どうしの序列さえ、基本的には死の際にいったん解消されてしまうことになるだろう。ブラーフマナ文献の時代までは祭式という人間による行為が関係していることから、前の「生」を終えて「死」を契機に次の「生」へ向かう状態は漠然とすべて人間であろうという前提の中でとらえられていた可能性が想定できた。しかしウパニシャッドにおいてその前提は解除され、前の「生」が人間であろうとなかろうと関係はなく、また次の「生」が人間であるかどうかとも問題ではなくなったといえる。「善をなすものは善となり、悪をなすものは悪となる」という枠組みの中では、業の質と量のみを基準に計量がなされ、自動的に序列化する形で次の行き先が決定され、それぞれの世界に振り分けられるだけである。

輪廻思想の枠組みにおいて、前の「生」において積み重ねた業の質と量によって次の「生」の行き先が決定される場合、「死」は次の「生」へ向かうための入口に位置づけられたと考えることができる。「生」において善をなしたものが、その結果として向かう次の「生」は身分の高い人間など、地上においては現在と同じ、あるいはより安楽な環境で暮らせる立場である。逆に悪をなしたものは現在よりも厳しい環境のもとで過ごす立場として次の「生」へ向かうことになる。ただしそれぞれの行き先は既に業によって決定づけられているため、「死」は今の「生」における業に色づけされたものたちを、単に次の「生」という行き先へ向かって何度でもひたすら送り出すのみの作業を続けるという、いわば自動転轍機のような機能を果たすことになっている。そこで本稿ではこの「死」を「～し続ける死」と位置づけることにする。

3 「生を支え続ける死」の完成

前節において、ヴェーダ文献が集成・整理されていくのにもなって輪廻思想が成立・発展してきた過程を、「生を支える死」「死を支える生」「～し続ける死」という 3 つの位置づけによって考察してきた。本節では 3 つの位置づけを結びつける要素として dharma 思想の影響を想定する。まず dharma の概念について概観したうえで、その dharma の概念が古代インド社会に及ぼした役割を確認し、dharma と輪廻が結びつくことで「生を支え続ける死」という位置づけが完成したことを示したい。

3-1 dharmā 概念について

ウパニシャッド文献の時代に完成したとされる輪廻思想では、業の考え方が死後の輪廻先そのものだけでなく、それを決定づける現世の生き方にも大きな影響を与えたことになる。業思想に基づくインド社会の実態像を知るうえで重要とされてきたのは、現在に至るまでインドの社会倫理規範の基盤を構成する dharmā の概念である。また「dharmā にのっとった生き方」としてさまざまな人生モデルを提示する役割を担ったのは dharmā 文献と総称される一群であることが想定されている²⁹⁾。

dharmā というサンスクリット語は「支える」という意味の動詞√dhr に由来し、一般に「支えるもの」「保持するもの」「維持するもの」を意味する。インドで発達したバラモンを頂点とする4つの身分階層区分³⁰⁾、4つの人生段階³¹⁾に応じた「本来のあり方」「本来の生き方」「本来なすべきこと」などを定め、それを本質的なものとして遵守しながら自身の生活を律していくものとして理解されている³²⁾。インド社会独特の倫理・道徳規範の全体を網羅してきたものともいえるが、意味の範疇は非常に広い。そのため dharmā を「倫理」と単純に翻訳することはできないが、少なくとも倫理そのもの、さらにその周辺領域をも含んだ概念であると考えて間違いのないというのが定説である³³⁾。

dharmā の出発点は、ヴェーダ聖典に基づく祭式という、一種日常を離れた特殊な場を設定して死後の「生」を目指した古代インド社会の上層に位置するバラモン階級が、実際に祭式を行っていない日常の場面においても常に祭式執行に備えた清らかな状態をいかに維持するかという、いわば振る舞いの追求であったという。dharmā 文献に対する先行研究により、先に成立したダルマーストラ (Dharmasūtra) と呼ばれる文献群ではバラモンが正しい日常を送るため、生活における作法、食事内容、社会との関わりにおける作法、正しく行動するための規則など「指針としての作法」、また仮にその作法からやむを得ず逸脱してしまった場合にこれを取消し元の状態に「復帰するための作法」、という2つの方向性で規定された内容が中核であることが明らかになっている。また、ある振る舞いが dharmā になかった生き方であるかどうかを判断するときは、バラモンで構成されるそれぞれの共同体において、dharmā を熟知した人々と認められた ācāra と呼ばれる長老グループが経験に基づき正しいかどうかを合意のもとに決めるという、一種の倫理委員会のような検討の仕組みが存在した可能性も指摘されている³⁴⁾。

このような形で当初はバラモンのみに保持されていた dharmā の概念は、その後ダルマシャーストラ (Dharmaśāstra) と呼ばれる文献群の段階になると、当時のインド社会全般の構成員を広く視野に入れた方向性を持ち、バラモン以外の人々に対応する規定を多く含むようになったと考えられている。

3-2 「生」における「あらゆるもの」「あらゆる人々」への浸透

輪廻思想と dharmā の関係を見ていくために、ここではまず dharmā の概念が古代インドにおける人々の社会生活に対してどれほど深い影響を及ぼしていたかという点について、ダルマシャーストラ文献のうち代表的なものとして位置づけられている『マヌ・スムリティ (Manu-smṛti : MS)』³⁵⁾ および『ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ (Yājñavalkya-smṛti : YVS)』³⁶⁾ の規定を例に示したい。

バラモンの理想的な生き方が示されている箇所において、例えば「学生期」と呼ばれる時期の若者には「師匠の前では常に師匠よりも粗末な食べ物を食べ、粗末な衣服や飾りを身につけなければならない」「師匠よりも先に起床し、師匠よりも後に眠らなければならない」(MS.2.194)「師匠の息子に対しては、手足をマッサージしたり、沐浴を手伝ったり、残りものを食べたり、足を洗っ

たりしてあげなくてもよい」(MS.2.209) というように、学生として師匠との良好な関係維持をはかるための規定などが提示されている。また「家長期」にある成人男性については、例えば放尿してはならない場所として「生き物の棲む穴」「歩きながら」「立ったまま」「川岸の近く」「山頂」(MS.4.47) など具体的に示す規定もあれば、「両手の平に水をすくって飲むこと」「膝に食べ物を置いて食べることを禁じる日常の作法や、社会で周囲との関係を良好に維持するため「無意味な振る舞い」「詮索好きであること」を禁じる (MS.4.63) といった言動の方向性についても指示がなされている。

もちろんバラモンのみに対してばかりではなく、例えば 4 種の身分のうち最下層にあたるシュードラの生き方について、本来バラモンに仕えるべきところを困窮した場合「バラモンに仕えることができない状況で、他に生活手段を求める必要があるときはクシャトリヤあるいは金持ちのヴァイシヤに仕える」(MS.10.121) というような例外を規定しているなど、個別の状況に応じた臨機応変なものとなっている。結婚や葬送、財産相続、犯罪の種類や処罰など、社会生活上必要な項目についても、身分や状況に応じて細分化された規定がある。

また、具体的な法的規則を収録している箇所では、「雇用者が仕事を放棄した場合は賃金の 2 倍を支払う」(YVS.2.197)「商品を二重に販売した場合、欠陥を隠して販売した場合、価格の 2 倍を支払う」(YVS.2.262) といった商取引上のトラブルにおける罰則、「紛争において偽証が判明した時は無効とし、既決であっても未決とする」(MS.8.217) といった法的手続きのルールや証書作成の書式、あるいは「担保がある場合の利息は月々 80 分の 1」(YVS.2.39) といったように具体的な利子や罰金の金額に至るまで細かく提示されている。もちろん規定通りにいかない状況を想定し、例えば罰金を払えない状況でバラモンには分割払い、それ以下の身分には労働による支払いを認める (MS.9.229) などというように、身分に合わせた柔軟な対応を示す姿勢もあり、当時の社会状況がどのようなものであったかが具体的に想像できるような内容が非常に多く含まれている。

ダルマシャーストラ文献で述べられている内容は、社会生活のあらゆる場面において「本来的になすべきこと」「したほうが望ましいこと」「うまくいかないときの対処」など dharma にのっとった行動指針である。現在の人生をどのように過ごすことが望ましく、トラブルが発生した時はどのように避けるべきであるかというモデルが個別の場面に応じて具体的に示され、人生のマニュアルとしての安心感をもたらしていた効果が想定されよう。ダルマシャーストラ文献により dharma の概念が広くインド社会全体に適用されたことで、身分階層や社会的地位、財産状況や犯罪経歴などにかかわらず、あらゆる立場の人々は等しく dharma にのっとった生き方を目指すことが一般化し、それに必要な具体的教示を受容する基盤ができていたと考えられる。

3-3 dharma と輪廻の連結：「生を支え続ける死」の完成

さて、dharma に沿う生き方を具体的に示したダルマシャーストラ文献の代表『マヌ・スメリティ』には、以下のような輪廻に関する規定が含まれている。

感覚器官に執着することと、dharma に従わないことによって、愚かで卑しい人間は、不幸な輪廻をさまよう。この生きるものは、この世界でいかなる行為によってこの世界のどのような母胎に入るのか、そのすべてを順序にしたがって学ぶべきである。³⁷⁾

ここでは「dharma に従って生きなければ望ましくない輪廻を得る」ことが明確な因果関係で示されているとともに、「どのような行為により、次の輪廻先がどこになるか」という具体的な内容についても示すと宣言した規定といえるだろう。「生」のあらゆる領域において dharma に沿った生き方が望ましいという考え方を前提に、次の「生」を決定するのは dharma に関わる業の質と量であるという考え方が成立したものといえる。

輪廻とは「生」と「死」を繰り返すことであるが、ひとつの「生」において「死」を迎えるまでには様々な行為をしながら過ごすことになる。これまで見てきたように、完成した輪廻思想の中では「死」を迎えたとき、次の「生」での行き先としての肉体は、業という個別性の高い原因によって多種多様に振り分けられることになっている。「生」においてどのような行動をしていたか、どのような生き方をしていたか、という内容がそのまま「死」を通じて向かう輪廻先に影響を与える。それを決定する原因は先述したとおり業すなわち行為のみである。具体的にどの行為がどの輪廻をもたらすかという因果関係はダルマシャーストラ文献に示されているが、それらは当時のインド社会における倫理的な善悪の判断によって色分けされていたことになる。

次の「生」となる輪廻先については先述したウパニシャッド文献でも提示されていたが、ダルマシャーストラ文献ではより具体的で細分化したものが列挙されている。特に犯罪者の輪廻先が多く提示されているのは、犯罪行為が倫理的な悪行として誰にとっても明白な位置づけを与えることができるだけでなく、そもそも犯罪自体が分類可能な特徴をもっているからであろう。例えば「害することを好む者→肉食の動物、食べてはならないものを食べる者→虫、盗みをはたらく者→魚、身分の低い女と交わる者→死霊」(MS.12.59)「黄金を盗む→蛆虫・虫・蛾」(YVS.3.209)「穀物を盗む→ネズミ、乗り物を盗む→ラクダ、果物を盗む→サル、家畜を盗む→ヤギ、乳を盗む→鳥、道具を盗む→スズメバチ」(YVS.3.215)といったように、人間社会における犯罪行為がそのまま次の輪廻先となる「生」での種類を決定づけることが示されている。

あるいは行動の基盤となる個々人の性格的傾向³⁸⁾についても「自己を知る者、清浄な者、抑制する者、苦行する者、感覚器官が制御されている者、ヴェーダに従って dharma を実行する者→神」「正しくない企てを喜ぶ者、落ち着きのない者、企てばかりする者、感覚器官の対象に関心を注ぐ者→人間」「眠りを貪る者、残忍なことをする者、貪欲な者、信心のない者、欲深い者、不注意な者、生活の乱れた者→動物」(YVS.3.137-139)というように次の「生」である輪廻先との関係が明確に示されている。

dharma と業=行為が結びついたことにより、輪廻先としてもたらされる次の「生」は、現世で暮らしている人間の日常生活におけるあらゆる行為の結果として設定されることになったと考えられる。つまり、バラモンが限定的に行っていた祭式という特殊な行為ではなく、dharma に関わる業というあらゆる身分階層・社会的地位・状況にあるすべての人々が日常的に実践するものを基準として、その質と量から自動的に多様な「生」へ振り分けられるという仕組みに変化したことになるだろう。こうして「死」は「生」におけるすべての業の蓄積に応じた次の「生」へ送り出し続けることを繰り返し、前世と現世、現世と来世を連結する「生を支え続ける」ものとして何度でも「生」の時間に差し込まれることになった。これによって終わりのない輪廻の構造が完成したといえる。

おわりに

輪廻の原因である業の内容は、ダルマシャーストラ文献によって dharma 思想との関連が進んだことにより、輪廻思想の初期においてヴェーダ聖典を基盤にした祭式という日常とは一線を画していた特殊な行為から、dharma に関わる日常の行為という形に大きく変化した。その背景には、ブラーフマナ文献において再死を避けるため激しく追及されていた祭式がウパニシャッドに説かれた五火二道説の中ではその影響力を弱めていたこと、代わりに新たな基準となった業の内容がダルマシャーストラ文献により広まった dharma の概念と結びついて多様・拡大化したことがあったものと想定される。

先に述べてきた「生を支える死」「死を支える生」「～し続ける死」という3つの位置づけは、以下のような段階を経て最終的に「生を支え続ける死」として連結したとまとめることができる。

- ①ヴェーダ聖典の時代：現世と Yama の住処という2つの「生を支える死」
- ②ブラーフマナ文献の時代：再死への恐れから祭式を追求して苦しみを帯びた「死を支える生」
- ③ウパニシャッド文献の時代：五火二道説+業の蓄積=次の「生」に送り出し続ける「死」の機能
- ④ダルマシャーストラ文献の時代：dharma 概念+業 → 輪廻の原因=dharma に関わる行為
- ⑤「生を支え続ける死」の完成

本稿では古代インド思想における「輪廻」を題材に、死生学においてよく見られる「差し込まれる死」とは異なる「生を支え続ける死」という視点を提示した。インドを含め東洋には他にもさまざまな生死観に関する思想が存在しており、今後も死生学や生命倫理の領域に対して新たな視点を提供することが望まれる。

【使用テキストと参照文献】

- ・ RV および MS・YVS については GRETEL: Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages (gretel.sub.uni-goettingen.de/gretel.htm) で公開されている電子テキストを使用した。
 - ・ 輪廻に関連する先行研究は非常に多いため、ここでは本稿の読者層を考えて日本語で書かれた概説的なもののみの列挙にとどめる。なお金岡 [1990]、沼田 [2005]、井狩・渡瀬 [2002] では先行研究の紹介が詳しい。
- 今井道夫 [2011] 『生命倫理学入門 第3版 (哲学教科書シリーズ)』産業図書, 東京.
- 清水哲郎・島藺進 (編) [2010]: 『ケア従事者のための死生学』, ヌーヴェルヒロカワ, 東京.
- 島藺進・竹内整一 (編) [2008]: 『死生学 [1] 死生学とは何か』, 東京大学出版会, 東京.
- 井狩弥介・渡瀬信之 (訳注) [2002]: 『ヤージュニャヴァルキヤ法典』, 平凡社, 東京.
- 金岡秀友 [1990]: 『インド哲学史概説 (仏教文化選書)』, 佼成出版社, 東京.
- 雲井昭善 [2013]: 「ゴータマ・ブッダの死生観」『仏教と看護 (藤本浄彦・藤堂俊英), pp.63-80, 法蔵館, 京都.
- 辻直四郎 [1970]: 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫, 東京.
- 辻直四郎 [1956]: 『辻直四郎著作集第一巻 ヴェーダ学 I』, 法蔵館,
- 中村元 [1968]: 『インド思想史 (第2版)』岩波全書, 東京.
- 中村元・三枝充恵 [2009]: 『バウツダ [佛教]』, 講談社学術文庫, 東京.
- 奈良泰明 [1967]: 「ヒンドゥー教」『講座東洋思想—インド思想』, 東京大学出版会, 東京.
- 沼田一郎 [2005]: 「法典類」『菅沼晃博士古稀記念論文集—インド哲学仏教学への誘い』, 菅沼晃博士古稀記念論文集刊行会 (編), pp.57-62, 大東出版社, 東京.
- 早鳥鏡正・高崎直道・原実・前田専学 [1982]: 『インド思想史』東京大学出版会, 東京.
- 藤田宏達 [1988]: 「原始仏教における生死観」『印度哲学仏教学』第3号, pp.38-63.
- 森口真衣 [2011]: 「古代インド医学書における『精神の病的状態』—『シャーリーラスターナ』を中心に—」『印度学仏教学研究』59巻2号, pp.258-264.
- 渡瀬信之 (訳注) [2013]: 『マヌ法典』, 平凡社, 東京.

-
1. 清水・島藺 [2010] など。
 2. 今井 [2011] など。
 3. 島藺・竹内 [2008] における指摘。

4. 1970年代以降、世界的現象として臨死体験と輪廻転生への関心が先進国を中心に高まったことは島藺・竹内〔2008〕も指摘するところであるが、その背景には宗教文化とその近接領域におけるさまざまな動きが連動している。これについては本稿の範囲とは異なるため、ここでは立ち入らないものとする。
5. 『新共同訳聖書』「創世記」3.1-24.
6. 失楽園のエピソードが記載される「創世記」を含めたいわゆる「モーセ五書」はキリスト教より先に成立したユダヤ教、またイスラームにおいても啓典として重視されているため、この視点は狭義のキリスト教に限らず、周縁の他宗教から切り離して論じることは多くの点で難しい。このことも踏まえ、本稿では「キリスト教的」という表現を狭義のキリスト教のみをさすものではないものとして用いている。
7. 島藺・竹内〔2008〕など。
8. いわゆる「不死」を目指す欲求については、「差し込まれる死」を永遠に回避したい願望と解釈することも、「生を支え続ける死」が永遠に訪れない状態と解釈することもでき、多くの議論の存在が想定される。しかし本稿では紙面の都合上そこには立ち入らないものとする。
9. サンスクリット語に対する俗語（プラークリット）のひとつで、スリランカや東南アジアなど南方に伝わった仏教では聖典語として用いられている。
10. 紀元前後からおこり始めたとされる大乘仏教運動の時代になると、学派の立場によって輪廻に関する概念の議論は細分化し、「生」や「死」の位置づけとあわせて非常に複雑なものとなっていた経緯は既に多くの仏教経典研究者によって明らかにされている。中村・三枝〔2009〕など。
11. 藤田〔1988〕など。
12. 以下、本稿では *samsāra* の翻訳語のうち「生死」と区別するため、ここで示した「生と死を絶え間なく繰り返す」という意味で「輪廻」の語を用いる。
13. 藤田〔1988〕など。
14. 早島・高崎・原・前田〔1982〕、中村・三枝〔2009〕など多くの研究者が指摘するように、仏教経典における分類では有名な「六師外道」を含め 62 の学説があったとされる。いわゆるバラモン文化はヴェーダ聖典（次注参照）を基盤としているが、彼らはそれを否定するという点で立場を大きく異にしていた。ゴータマ・ブッダもまた当時の社会的背景から必然的に登場して新時代の要請に応えた自由思想家のひとりとして位置づけるのが現在の定説となっている。
15. ヴェーダ (*veda*) とは「知る」を意味するサンスクリット語動詞√*vid* に由来し、インドに定住したアーリア人によって紀元前 10 世紀以前から 1000 年以上かけて成立したとされる聖典の総称である。Max Muller, F(1823-1900) や Winternitz, M(1863-1937) に始まる先行研究を通して讃歌の整理や分類、その複雑な成立経緯が明らかになりつつあり、古代バラモン教だけでなく現在のヒンドゥー教もすべてその根源はヴェーダに発しているものと位置づけられており、文献だけでなく思想体系そのものに対する呼称として用いられる場合もある。ヴェーダ文献は内容から『リグ・ヴェーダ』・『サーマ・ヴェーダ』・『ヤジュル・ヴェーダ』・『アタルヴァ・ヴェーダ』という 4 種類に分類され、さらに成立時期により大まかにはサンヒター (*Samhitā*)・ブラーフマナ (*Brāhmaṇa*)・ウパニシャッド (*Upaniṣad*) の 3 段階に分類されている。なお本稿で「ヴェーダ聖典」と呼称する場合はヴェーダのうち最初期に成立したサンヒターを指し、「ヴェーダ文献」と呼称する場合には上記の 4 種類 3 段階すべてを含むものとする。
16. ここでいう『リグ・ヴェーダ』とは前注で触れた 3 段階のうち最初に成立したサンヒターのみを指している。

17. 中村 [1968]、辻 [1970] など。
18. RV.10.14.1-2. 中村 [1968]、辻 [1970] など。
19. 人類の祖は Yama とその兄弟である Manu である。Yama は最初の死者であり、Manu は最初の祭祀者である。早島・高崎・原・前田 [1982] など。ただし『リグ・ヴェーダ』における人類出現のエピソードには、例えば『旧約聖書』における世界創造のように人類を特別な存在として位置づける姿勢は見られない。金岡 [1990] 参照。
20. 地獄の原語はサンスクリットで naraka (ナラカ) といい、「奈落 (ならく)」の音写語が知られている。輪廻と同じく古代インド思想において登場した概念だが、仏教にも取り入れられ発展したとされており、多くの仏教經典で有名な「八大地獄」など、さまざまな地獄の姿が鮮明に説かれている。
21. 中村 [1968] など。
22. 祭式は必ずしも死後のためだけではなく、さまざまな願望に対してそれぞれに対応する膨大な祭式があり、また祭式の執行に少しでも誤りがあれば無効となるため、それを取り消すための祭式も必要とされた。この「誤りを取り消す」という考え方は後述する dharma 思想に引き継がれ、現世での罪を取り消すことが輪廻に影響を与えると考えられるようになった可能性が指摘されている。井狩・渡瀬 [2002] 参照。
23. 辻 [1956] で体系的にまとめられている。
24. ウパニシャッド文献と総称される文献群は、その内容と位置づけから「古ウパニシャッド」および「新ウパニシャッド」に分類され、通常「ウパニシャッド」と呼称する際は紀元前 5 世紀頃を中心に紀元前 8 世紀～紀元 2 世紀頃にわたって作成されたとされる「古ウパニシャッド」を指すのが定説である。また古ウパニシャッドの成立期は仏教成立とも重なりがあることから、中村 [1968] のように「初期 = ゴータマ・ブッダ以前」「中期 = ゴータマ・ブッダ以後」「後期」という分類も一般的である。本稿でもこれを踏襲し「ウパニシャッド」と総称する場合は「古ウパニシャッド」を指す。
25. 中村 [1968] など。
26. 現代日本語ではいわゆるスピリチュアル・ビジネス業界を中心に発信された「カルマ」の語が一般化している。業の原語はサンスクリット語では karman、仏典語として用いられるパーリ語では kamma といい、カナ表記ではそれぞれ「カルマン」「カンマ」となる。karman は活用上 karma「カルマ」の形をもつため必ずしも誤記とはいえないものの、日本語で「カルマ」の表記が用いられる場合は上記の原語と全く異なる意味で解釈されていることが多い。本稿ではその現状を踏まえ漢訳語の「業」を用いる。
27. 金岡 [1990] など。
28. 金岡 [1990] の指摘では、業が秘説とされたのはバラモンを頂点とするインドの身分制度社会に対して、人間や動物さえ区別しない徹底した平等感を説いた点であるという。
29. 多くの dharma 文献研究者が整理したところによると、まずダルマーストラ (Dharmasūtra) と総称される文献群が成立し、次にダルマシャーストラ (Dharmaśāstra) と呼ばれる文献群が登場したという。うち前者はバラモンとの関わりが深い古層とされており、両者の位置づけは沼田 [2005] において簡潔に整理されている。
30. 上からバラモン (= ブラーフマナ: brāhmaṇa)、クシャトリヤ (kṣatriya)、ヴァイシヤ (vaiśya)、シュードラ (śūdra) がある。上層の 3 種がアーリア人、シュードラは被征服民となった非アーリア人で主に構成されていたことから、皮膚の色に由来して「ヴァルナ (varṇa : 色)」と総称された。なお近年まで続いた「カースト制度」として知られるインド独特の身分制度は、上記のヴァルナに加え、出生と職能に基づく身分階層「ジャーティ (jāti)」を合わせたものである。金岡 [1990] など。

31. サンスクリット語では順に brahmacarya、gārhasthya、vānaprastha、saṃnyāsa といい、それぞれ「(ヴェーダの伝承を学ぶ) 学生期」「(結婚し子をもうけ一家の主として生活する) 家長期」「(老後に引退して荒野や林などで隠遁生活をする) 林住期」「(定住をやめ単独で遍歴する) 遍歴期」と呼ばれている。渡瀬 [2013]、井狩・渡瀬 [2002] など。
32. 渡瀬 [2013] をはじめ多くの指摘によると、既に『リグ・ヴェーダ』の段階で神々と自然現象などを結びつける観念として dharma が登場し、基本的な概念は出揃っていたが、実際の人間社会と結びつくことには長い時間を要したとされている。
33. 渡瀬 [2013]、井狩・渡瀬 [2002] では dharma の概念経緯が詳細にまとめられている。なお dharma には中国で仏教経典が漢訳された際に「法」という漢訳語が用いられた。日本でも基本的にその表記を踏襲したが、のちに「法」を「規範」よりも「法律」のニュアンスで解釈し、dharma を扱う文献が一般に「法典」という日本語で総称されることが増えたために、dharma が「法的規則」のみを指し、dharma 文献が「法律集」であるという誤解の発生が懸念されてきた。沼田 [2005] も参照。
34. 井狩・渡瀬 [2002]・渡瀬 [2013] など。
35. 正式には *Mānava-dharma-sāstra* といい、紀元前 200 年前後～紀元後 200 年前後に成立したと想定されている。渡瀬 [2013] 参照。
36. 『マヌ・スムリティ』をモデルとしてコンパクトな体裁で構成したもので、遅くとも紀元後 600 年までには現在の形になっていたと想定されている。井狩・渡瀬 [2002] 参照。
37. MS.12.52-53.
38. 『ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ』における輪廻の記載箇所は、一部のインド医学書と構造的類似が確認されており、医学書における性格分類や精神の病的状態との関連が想定できる。井狩・渡瀬 [2002]、森口 [2011] 参照。